

『韓国語教育研究』(第5号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

## 敬語の過剰使用に関する日韓対照研究

河 正一

日本韓国語教育学会

2015年9月

# 敬語の過剰使用に関する日韓対照研究

河 正一

本稿は、過剰敬語を言葉の変化の過程として捉え、日韓両言語における過剰敬語とは何か、また、過剰敬語が社会全般に広がる原因とは何かについて、分析を行った。両言語の敬語は視点と距離に基づいた社会的対人関係の表現として現れるが、日本語の敬語はウチ／ソトという視点の捉え方から対人関係に関わる過剰敬語、表現形式に関わる過剰敬語、状況に関わる過剰敬語が見られる。一方、韓国語の敬語は社会的力関係という視点の捉え方から、表現形式「-크게요」に関わる過剰敬語が見られるものの、やはり主体敬語「-시-」に関わる過剰敬語が一般的である。こうした両言語における過剰敬語の相違は、敬語使用における視点の捉え方と現代韓国語における客体敬語の衰退に起因する。また、過剰敬語が社会全般に広がる原因は、社会の民衆化や平等化と相まって社会的言語規範としての敬語使用から互いの相互尊重を基盤とした円滑なコミュニケーションとしての敬語使用への役割の変化が過剰敬語を促す。

## 1. はじめに

従来の敬語<sup>1</sup>に関する日韓対照研究では、文法的側面を重視した記述や敬語使用・不使用における社会的要因（上下関係、親疎関係など）に焦点を置いた研究などが多かった。一方、近年、両言語社会では、敬語の過剰使用（以下、過剰敬語<sup>2</sup>とする）に対する懸念の声が高まり、それを問いただそうとする多くの研究や解説書が目立っている。ただし、両言語における過剰敬語の研究では、実際に過剰敬語とは何か、どういう敬語使用が過剰敬語と見做されるかなどといった根源的な問いにはあまり注意を払っていない。

そして、この過剰敬語に関する捉え方には、おおむね言葉の誤用や乱れという立場と言葉の変化の過程という立場が見られる。取り分け、多くの解説書は過剰敬語

<sup>1</sup> 両言語における敬語の研究では、研究者によって敬語（法）、待遇法（表現）、尊待法などの用語が用いられているが、本稿では敬語もしくは敬語法を用いることにする。

<sup>2</sup> 河（2013）は、過剰敬語とは、相互言語行為として期待される言語使用より丁寧な敬語使用を過剰敬語とする。

を誤用や乱れとして扱い、意図的に排除しようとするが、筆者から見れば、自然な言葉の変化を阻止しようとする動きにも見える。井上（1986）によれば、新しい言語現象は、使用率が低い段階では「誤用・乱れ」と感じられるが、使用率が上がってくると、「慣用」として許容され、やがて「正用」と見做される。すなわち、過剰敬語は、現段階ではまだ使用率の低い新しい言語現象であるものの、誤用や乱れという捉え方ではなく、言葉の変化の過程として捉え、分析すべきであろう。

そこで、本稿では、過剰敬語を言葉の変化の過程として捉え、日韓両言語における過剰敬語とは何か、また、過剰敬語が社会全般に広がる原因とは何かについて、言語内部構造や語用論的側面、そして社会言語学的側面から分析を試みる。

以下、2 節は、両言語における敬語の構造について論じる。3 節は、過剰敬語とは何か、すなわちどういう敬語使用が過剰敬語となるか、また両言語では、どういう過剰敬語が見られるかについて論じる。そして、4 節では、過剰敬語が社会全般に広がる原因を考察する。

## 2. 敬語の構造

### 2.1 日本語の敬語

平成 19 年度文化審議会答申では、敬語とは人と人との「相互尊重」の気持ちを基盤とすべきものであり<sup>3</sup>、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きを持つとする<sup>4</sup>。

そして、敬語を以下の 5 分類している。

- ・ 尊敬語（相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの）「いらっしゃる・おっしゃる」型
- ・ 謙譲語 I（自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの）「伺う・申し上げる」型

<sup>3</sup> 敬語の捉え方には、おおむね敬意の表現としての捉え方と関係認識としての捉え方がある。詳細は山下（2001）、滝浦（2005）などを参照されたい。

<sup>4</sup> 敬語の機能について、大石（1983：20-24）は、①あがめ、②改まり、③隔て、④品格・装飾・威厳、⑤軽蔑・皮肉を挙げている。また、北原（1996：175-177）は、①尊敬、②改まり、③疎遠、④品格保持、⑤優しさなどに分けて説明している。

- ・謙讓語Ⅱ（丁重語とも言う。自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの）「参る・申す」型
- ・丁寧語（話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの）「です・ます」型
- ・美化語（ものごとを、美化して述べるもの）「お酒・お料理」型

上記の尊敬語と謙讓語Ⅰが話の素材となる人物・事柄・事物に関する素材敬語に、一方、丁寧語と謙讓語Ⅱは聴者に関する対者敬語に属する。現代日本語の敬語は、話者と聴者、そして話題の人物を総合的に考慮して敬語を選択する相対敬語<sup>5</sup>に分類される。

## 2.2 韓国語の敬語

韓国語における敬語研究は、大別して対人関係に重きを置いた敬語法と言語形式に重きを置いた敬語法に研究されてきた。前者は社会言語学的観点から敬語法を対人関係に基づいた言語的手段を示す表現として捉え、社会的要因から敬語法を記述する<sup>6</sup>（이익섭 1974、서정수 1984、성기철 1991 など）。一方、後者は統語論的観点から敬語法を文法的要素として記述する（박양규 1975、강창석 1987、임홍빈・장소원 1995 など）。

一般的に現代韓国語の敬語は、主体敬語（尊敬語）、客体敬語（謙讓語）、対者敬語（丁寧語）に分類される。

- ・主体敬語（話者が文章に現れる行為や存在、状態などの主体を高める）尊敬補助語幹「-시- (-si-)」を付けて表す。
- ・客体敬語（述語の客体、すなわち文章の目的語や副詞語が指示する対象を高め

<sup>5</sup> 金田一（1959：25-27）は敬語の起源について、敬称の接尾語や代名詞がタブーに基づく禁忌から発しているとし、敬語は古代から現代にかけて絶対敬語から相対敬語へ変遷してきたという。一方、福島（2013：156）は奈良、平安時代も現代の敬語と同様に相対敬語であったという。

<sup>6</sup> 서정수（1984：5-6）は、社会的対人関係を示すのが敬語の主な機能であるとし、上下秩序の表出、親疎関係の表現、人間的な品格の表現、これら三つをもって敬語法を記述している。また、성기철（1991：12）は、敬語を社会的対人関係の秩序を表出するものとし、一次的には話者の品格や教養を表し、二次的には社会の秩序の確認と維持・発展に寄与するという。一方、최봉영（2005：5-9）は韓国社会における敬語は形式的な権威主義の一つであるという。

る) 드리다 (差し上げる)、모시다 (お連れする)、여쭙다 (お伺いする)、뵙다 (お目にかかる) などの語彙レベルである<sup>7</sup>。

- ・ 対者敬語 (話者が聴者を高めたり低めたりする)

	格式体	非格式体
尊待	上称 (합쇼체)	略待丁寧形 (해요체)
	中称 (하오체)	
非尊待	等称 (하개체)	略待普通形 (해체)
	下称 (해라체)	

そして、韓国語の敬語の特徴について、梅田 (1977 : 268) は「朝鮮語の敬語は、身分規定に基づき階層的に細分化された体系で、日本語の敬語にくらべて、はるかに複雑である。しかしながら、一方、その用法を見ると、日本語は具体的な場面場面によって変幻自在な使い方がされていて法則性を見いだすのがむずかしいが、これに対して、朝鮮語の敬語は、絶対敬語的性格が濃く、対象や場面によってその用法をはっきりと規定しやすいという点が特徴的である。」と述べている。

一般的に絶対敬語とは、話題の人物が話者より社会的・年齢的地位が上位であれば、聴者に関係なく高める敬語法である。しかし、韓国語の敬語には、聴者が話題の人物より社会的要因が上位であれば、その話題の人物を高めない「上位者聴者制約<sup>8</sup>」がある (詳細は3.2節で論じる)。

### 3. 過剰敬語

#### 3.1 日本語における過剰敬語

##### 3.1.1 対人関係に関わる過剰敬語

<sup>7</sup> 古代韓国語の敬語には主体敬語と客体敬語が、そして中世には主体敬語、客体敬語、対者敬語のすべてが存在していた。しかし、近代以降からは客体敬語が衰退して主体敬語と対者敬語となっている。森下・池 (1989 : 156-159) は学校文法における客体敬語の扱いの不足と、また韓国社会は自分を卑下することを嫌っていることが謙讓語の衰退をもたらしたという。一方、곽숙영 (2009 : 60-61) は主体敬語における尊待の対象となる主体と対者敬語における尊体の対象となる聴者に比べ、客体敬語の対象となる文章の主体と客体との関係が比較的重要な度合いが低かったことが客体敬語の衰退の一つの要因であるという。

<sup>8</sup> この上位者聴者制約을 서정수 (1984 : 85) は「圧尊法」という。

過剰敬語とは何かという問いについて、河（2013）では滝浦（2005）の見解から適切な敬語や過剰敬語、過少敬語に関する見解を示している。まず、滝浦（2005：第3章）によれば、日本語の敬語いわゆる尊敬語・謙讓語・丁寧語は、それぞれに固有の共感度関係<sup>9</sup>をもっている。この共感度関係は、久野（1978）が授受動詞などについて示したのと同じように「視点」による制約の反映であり、それゆえ、共感度関係を定式化したものは、敬語の対人的な機能と使用における制約とを同時に表示するはずであるという。その上、敬語は距離化の表現であり、対象人物を遠くに置くことはその人物を“ソト”待遇することであり、それは、その人物を脱距離化的に“ウチ”待遇することと相反関係にある。それゆえ、敬語使用の反対面にある敬語の不使用が、対象人物を“遠くに置かないこと”によって領域の共有を表現する。そうして、ウチ／ソトの区別が鍵となるが、“ウチ”と“ソト”の境界は固定的なものではなく、そのつど話者の「視点」によって構成され更新されるような、流動性の高いものである。その流動性ゆえに、話者のとる「視点」とそこから表現される「距離」が、語用論的“含み”を発生させるのである。そして、敬語の対人的な機能と使用における視点と距離が矛盾すれば、その表現は「誤用」及び「不敬」の含みを帯びるとする。

- 1) 電子レンジ二十三年、衣類乾燥機十七年、ガスレンジも長く使った。故障の度に修理を選ぶ夫に、私の言葉はいんぎん無礼となり、「わかりました。感電死するまで使います。ガス中毒になるまで使います」と応戦してきた。（朝日新聞 1998.11.27）
- 2) 不動産関係の会社は、社名を言わずに「〇〇と言いますが、ご主人いらっしゃいますか」と個人を装ってかけてくる。…中略…私が大学生の時には「今何してたの？どこの大学？最初の文字だけ教えて、当てるから」などと、なれなれしい口調で話された…中略。（朝日新聞 2009.12.10）

---

<sup>9</sup> 久野（1978：129-180）は、文中の名詞句の x 指示対象に対する話者の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び、その度合、すなわち共感度を E (x) で表す。共感度は、値 0（客観描写）から 1（完全な自己同一視化）迄の連続体である。話者が示す言語表現には、話者の「カメラ・アングル（視点）」が反映され、ある文が適格文か不適格文かという判断には、自己同一視化の度合いである共感度に関するいくつかの談話法規則を満たさなければならないという。

上記の滝浦の見解から河（2013：243）は、対人関係における視点と距離に基づいた敬語使用・不使用が互いの許容範囲に収まれば、適切な敬語使用と見做される。一方、敬語使用・不使用が互いの許容範囲に収まらなければ不適切な敬語使用となるが、不適切な敬語使用が視点より距離を遠くに置く、例えば例1)のように親しい間柄における敬語使用が過剰敬語となり、視点より距離を近くに置く、例えば例2)のように親しくない間柄における敬語不使用が過少敬語となるという。そこで、本稿も河（2013）に倣って、対人関係における視点より距離を遠くに置く敬語使用を過剰敬語（以下、対人関係に関わる過剰敬語とする）とし、視点より距離を近くに置く敬語使用を過少敬語とする。ただし、こうした対人関係における過剰敬語は、話者の言語方略（strategy）として、意図的に適切な視点と距離を離脱させることで時には、親しみの語用論的含みを、時にはよそよそしい語用論的含みをもたらす。つまり、対人関係に関わる過剰敬語もしくは過少敬語は語用論的側面との関わりが高い。

### 3.1.2 表現形式に関わる過剰敬語

過剰敬語には次のように特定の表現形式を多用する過剰敬語がある。

- 3) 早退を申し出る表現「今日はこれで帰らせてください」（敬語の指針）
- 4) お越しをいただきました。（野口 2013）
- 5) 先生がお越しになりました。（敬語の指針）
- 6) 洋服店で「お洋服のお色目もよくお似合いでお値段もお手ごろ」などと言われ不快。（朝日新聞 2001.06.30）

3) における「さ入れ言葉」、4) における「を入れ言葉」、5) における「二重敬語」、6) における「美化語」の使用は、特定の表現形式が過剰に用いられている（以下、表現形式に関わる過剰敬語とする）。佐野（2008：101-102）によれば、「さ入れ言葉」は言語内的要因としてほぼ短い動詞に限られ、性別、生年、居住地、及びスタイルに関する言語外的要因を受けており、それが現在初期段階にある進行中の言語変化として、改まった場面で使用される傾向があるという。同様に「を入れ言葉」

や「二重敬語」、「美化語」の多用も丁寧に話そうとする心理的要因に動機づけられて現れる現象である。ただし、日本語の可能形における「れ不足言葉」、例えば「決める」の可能形を「決められる」とする言い方は、過剰敬語とは言い難い。なぜなら「れ不足言葉」は改まった場面よりもくだけた場面で多く観察されるからである（佐野 2009 : 351）。つまり、表現形式に関わる過剰敬語とは、丁寧に話そうとする動機づけから生まれた特定の表現形式が多用される敬語使用のことである。

- 7) お飲み物のほうはいかがです。(洞澤・岡 2006)
- 8) 1000 円からお預かりします。(洞澤・岡 2006)
- 9) こちら領収書になります。(本田 2006)

そして、この表現形式に関わる過剰敬語には、7) における「～ほう」、8) における「～から」、9) における「～になります」などといったマニュアル敬語（バイト敬語ともいう）も属する。マニュアル敬語とは、職場での言語使用、特に接客の場面での言語使用について具体的な言語表現などを示すものであり、こうした用法も前節における視点と距離の不調和による過剰敬語というより、特定の表現形式に関わる過剰敬語と見做すことができる。

### 3.1.3 状況に関わる過剰敬語

なお、上記の過剰敬語とその性質が異なる過剰敬語が見られる。

- 10) 「私は、〇〇高校を卒業させていただきました」(敬語の指針)
- 11) 都内の私立女子大に籍を置き、意中の大学を目指して仮面浪人している A 子さん (19) は学校では意識して慇懃無礼を演じている。「うちのお父さんが」なんていう級友に交じり、ひとり「私の父は」を貫く、といった具合だ。私ってあなたたちとは違うのよっていう意識だ。(朝日新聞 1999.11.29)
- 12) ハンバーガー店の店員は小学生にまで「お持ち帰りですか」と言う。(朝日新聞 2001.06.30)



平成 19 年度文化庁における敬語の指針では、「(お・ご) … (さ) せていただく」といった敬語の形式は、基本的には、自分側が行うことを、ア) 相手側もしくは第三者の許可を受けて行い、イ) そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に用いられる。したがって、ア)、イ) の条件をどの程度満たすかによって、「発表させていただく」など、「(さ) せていただく」を用いた表現には、適切な場合と、余り適切だとは言えない場合とがあるとする。10) について「私は、卒業するのが困難だったところ、先生方の格別な御配慮によって何とか卒業させていただきました。ありがとうございます。」などという文脈であれば、必ずしも不適切だとは言えなくなるという。無論、この「(さ) せていただく」という敬語の形式は前節の特定の表現形式に関わる過剰敬語と類似性が高い。しかし、「(さ) せていただく」の形式は状況によっては、適切な敬語使用として見做されたり、過剰敬語として見做されたりするがゆえに、本稿では状況に関わる過剰敬語として分類する(以下、状況に関わる過剰敬語とする)。

また、11) における「私の父は」という発話も、通常は身内のことを相手に高めてはいけないという日本語の敬語法に沿った適切な敬語使用である。しかし、級友たちはみな「うちのお父さんが」という状況の中で、話者だけが「私の父は」というのは、敬語に関する世界の知識や級友たちの間における言葉遣いの経験からすれば、過剰敬語と見做すことができる。そして、12) における店員の小学生に対する「お持ち帰りですか」という発話も同様に、状況に関わる過剰敬語と見做すことができる。

以上、日本語の過剰敬語には、対人関係・表現形式・状況に関わる過剰敬語が見られるが、こうした過剰敬語は話者の言語方略の側面と、社会の変化に伴う言葉の変化の過程としての側面を併せ持つ。

## 3.2 韓国語における過剰敬語

### 3.2.1 対人関係に関わる過剰敬語

日本語の敬語はウチ／ソトという話者のとる視点と距離の区別が敬語の使い方の鍵となる(滝浦 2005)。一方、성기철 (1991) によれば、韓国語の敬語では、話者と相手との位階関係と親疎関係が敬語の使い方の鍵となる。この位階関係とは、

社会生活における一般的な上下関係（年齢、社会的地位、血縁関係など）によって決定される概念であり、親疎関係とは、お互いがどの程度、親しいかという感情的な概念である。つまり、話者を中心に話者と聴者、話者と第三者の社会的関係を示す言語的手段が敬語であり、聴者や第三者を高めるということは、一般的に話者より社会的要因が上位である、もしくは親しい関係ではないことを意味する。したがって、韓国語の敬語も日本語の敬語と同様に視点と距離に基づいた社会的対人関係の表現として見做すことができる。ただし、日本語の敬語はウチ／ソトが視点の鍵となるが、韓国語の敬語では社会的要因、いわゆる社会的力関係が視点の鍵となる<sup>10</sup>。

### 13) 할아버지, 어디에 가세요? (話者：孫)

お祖父さん、どこへいらっしゃいますか。

その上、韓国語の敬語法では、話者より社会的力関係の上位者に対して主体敬語である尊敬補助語幹「-시-<sup>11</sup>」を付けて高める。また、話者より上位者である聴者に対しては、格式体もしくは非格式体の対者敬語を付けて高める。13)は「話者<聴者=話題の人物」の関係のため、主体敬語と対者敬語が同時に用いられている。

ところが、성기철 (1991:9)は韓国語の敬語における最も上位にある制約は、「上位者聴者制約」であるという。この制約は聴者が最も上位者の場合であれば、他の人物を高めてはいけないということである。つまり、話者の敬語使用は聴者と話題の人物との社会的力関係によって決められる。

<sup>10</sup> 이익섭 (1994:233)は、敬語法に影響を与える要因は、親族の序列、職場(社会的)、年齢、親疎の順であり、そのうち親族の序列が最も優先的であるという。また、박지순 (2014)は、映画のシナリオを通じて、対者敬語に影響を及ぼす要因を分析し、話者が相手に格式体か非格式体を用いるかは、場面に対する配慮、すなわち改まった場面であるか否かが重要な要因として働く。そして、話者の年齢、聴者の年齢、地位の差、お互いの年齢の差、親疎関係、ジャンル、話者の性別などの順に対者敬語の選択に影響を与えるという。つまり、韓国語の敬語は社会的力関係という視点に重きを置いた敬語使用である。

<sup>11</sup> 尊敬補助語幹「-시-」の意味に関する従来の研究は、大きく尊待説(존대설)、呼応説(호응설)、指示説(지시설)に分けることができる。尊待説は「-시-」を話者の尊待の意志を表明する文法形式として見做し、呼応説では上位者が主語の役割をする時にこれに呼応して叙述語に現れる文法形式として見做す。そして、指示説では「-시-」を発話の参加者間における社会的関係を有標的に示す要素として見做す。詳細は임동훈 (2000:第3章)を参照されたい。

- 14) a. \*할아버지, 아버지 오셨어요? (話者 : 孫)  
\*お祖父さん、お父さんいらっしゃいましたか。
- b. 할아버지, 아버지 왔어요? (話者 : 孫)  
お祖父さん、お父さん来ましたか。
- c. 할아버지, 저희 학교 선생님이 오셨어요? (話者 : 孫)  
お祖父さん、私の学校の先生がいらっしゃいましたか。
- d. 할아버지, 저희 학교 선생님이 왔어요? (話者 : 孫)  
お祖父さん、私の学校の先生が来ましたか。

14) は話者が聴者に話題の人物が来たかを質問する発話である。14) の a と b は、「話者 (孫) < 話題の人物 (お父さん) < 聴者 (お祖父さん)」という社会的力関係であり、聴者が最も上位者である。ゆえに、上位者聴者制約によって、話題の人物の行為を高める尊敬補助語幹「-시-」が付いている a は非文となる。一方、b は話題の人物を高めずに聴者を高める対者敬語の略待丁寧形のみが用いられているため、適切な敬語使用となる。すなわち、聴者が最も上位者であるため、例えば話題の人物が話者のお父さんであっても高めてはいけない<sup>12</sup>。ただし、聴者と話題の人物が同位であれば、c のように「主体敬語+対者敬語」を用いることもあり、また、先生の年齢によっては d のように「対者敬語」のみが用いられることも考えられ、日本語と同様に話者の取る視点の捉え方の流動性が高い。しかし、近年、上位者聴者制約は若い世代のほど、緩和されつつある (성기철 1991 : 10)。

以上、韓国語の敬語も日本語の敬語と同様に、視点と距離に基づいた社会的対人関係の表現として現れる。しかし、日本語の敬語はウチ/ソトという視点の捉え方が鍵となるが、韓国語の敬語は社会的力関係が視点の鍵となる。その上、聴者が最も上位者の場合であれば、他の人物を高めてはいけないという上位者聴者制約が適用される。つまり、談話参加者間における聴者と話題の人物との社会的力関係を考慮し、上位者聴者制約に沿った敬語使用が適切な敬語使用となる。一方、聴者が最も上位者にもかかわらず、話題の人物や他のモノ・状態を高める敬語使用が対人関

<sup>12</sup> 아시다마끼코 (2005) は、韓国語における敬語使用の使い方について、会社員を対象に質問紙調査を行った。その結果、話者の主体敬語の使い分けは、上位者聴者制約、すなわち聴者と話題の人物との上下関係によって決まるという。

係に関わる過剰敬語となり、社会的力関係の上位者である聴者や話題の人物に対して敬語の不使用が対人関係に関わる過少敬語となる。

### 3.2.2 主体敬語「-시- (-si-)」に関わる過剰敬語

韓国語の過剰敬語において最も目立つのは、尊敬補助語幹「-시-」の過剰使用である。一般的に尊敬補助語幹は、社会的力関係の上位者の動作や状態を高める時に使う。次の例を見よう (이래호 2012)。

- 15) 선생님이 오신다. 先生がいらっしゃる。
- 16) a. 김 선생님이 키가 크시다. キム先生が背が高くていらっしゃる。  
b. 아버지께 지팡이가 있으신다. お父さんは杖がおありになる。  
c. 선생님의 건강이 안 좋으신다. 先生の健康 (体調) が良くない。

15) における「-시-」は直接、文章の上位者の主体である先生を高めている。一方、16) では、通常、述語の主体である「背」、「杖」、「健康」は敬語の対象として扱うことができないが、主語と関連を持つ「背」、「杖」、「健康」を「-시-」で高めることで、敬語の対象である「先生」、「お父さん」、「先生」を間接的に高めている。15) を直接主体敬語といい、16) を間接主体敬語というが、15) と 16) はいずれも、文章の中に尊待の対象が存在し、その尊待の対象を「-시-」で高めるといふ点、そして尊待と関連して聴者の役割がさほど必要ではないという点が共通している (이래호 2012 : 148-149)。しかし、近年、発話の中に尊待の対象が存在しない、もしくは具体的に表れていないにもかかわらず、「-시-」が使われる発話が多く見られる。次の例を見よう (이정복 2010)。

- 17) a. 생일선물이 고민이세요? 誕生日のプレゼントが悩みでいらっしゃいますか。  
b. 즐겁고 행복한 새해 되세요. 楽しくて幸せな新年でいらっしゃいますように。  
c. 고객님 이 잡채는 테이크아웃이 안 되시구요.  
お客様、このチャプチェはお持ち帰りになっていらっしゃいません。

d. 주문폭주로 배송시일이 소요되는 상품이세요.

ご注文殺到のため、配送の時間がかかる商品でいらっしゃいます。

17) における「-시-」の尊待の対象は文章の主語もしくは主体ではない<sup>13</sup>。aは誕生日のプレゼントを高めるために、「-시-」が用いられているとは考えにくい。いわゆる、尊待の対象が現れていないが、聴者である先生／お客様を想定すると、結局、聴者を高めるために「-시-」が用いられていると見做せる。同様に b も尊待の対象は新年ではなく聴者であり、さらに c と d における「-시-」は、あまりにも聴者を意識した結果、用いられた不自然な過剰使用である。こうした「-시-」の過剰使用を 이정복 (2006, 2010) は「状況主体 (聴者) <sup>14</sup>敬語」といい、文章には現れていないが発話の状況における聴者を高めようとする動機づけから過剰使用が拡大しているという。つまり、目の前に存在する上位者を最も尊待しなければならない上位者聴者制約がさらに、状況的に目の前に存在する聴者への配慮として拡大解釈・適用された結果、現れる過剰敬語である。

しかし、この「-시-」の過剰使用は、状況主体敬語と関連を持たない状況においても拡大されている。次の例を見よう (이수연 2012)。

18) a. 점원 : 이 부분은 저희 쪽에서 처리해 드리기가 어려우세요.

店員 : この部分は私どもで処理して差し上げるのはお難しいです。

b. 점원 : 저희 오늘은 9 시까지 하세요.

店員 : 私ども、今日は9時までに (営業を) なさいます。

18) における a と b の主語には、自分側を遜る表現として「私ども (저희)」が使

<sup>13</sup> このような現象は日本語にも見られる。北澤 (1995 : 37) は、日本語において主語が動物や無生物などのモノであるにもかかわらず、尊敬語が使われる誤用があると指摘する (例えば、「頭の上のあみ棚に荷物がのっていらっしゃいますが、危険ですので、くれぐれも…」や「お野菜がもう少し安くなってくださるとね…」など)。

<sup>14</sup> 이정복 (2010 : 223) は、発話の状況を左右する力を持つ存在として発話の状況ならびに話者の敬語使用を支配する聴者のことを状況主体とし、状況主体は動作の主体と状態の主体に対応する概念であるという。一方、丁 (2013 : 65) は、こうした「-시-」の使用を「所有者」の拡張と捉え、事物尊称は店員 (話者) が客 (聴者) に敬意を表すという限られた状況の下で用いられるという。

用されている。しかし、述語では主体を高める「-시-」が使用され、文章に矛盾が生じている。こうした「-시-」の過剰使用について、이수연 (2012 : 86) は、主体と関連を持つものや事態を高める用法が 1 段階であるとするれば、2 段階は「-시-」が尊待の対象になる聴者との対話に登場するものや事態を高める段階である。しかし、最近では聴者との対話における話者（自分）の行動まで高める現象が見られる。もちろん、こうした発話が話者自身を高めようとする意図で発せられたとは考えにくい。これは聴者を高めようとする意図が他の対象に転移されて現れる現象であるという。つまり、主体との関連を持つモノや事態における適切な主体敬語使用から聴者との対話に登場するモノや事態を高める過剰使用、ひいては話者自分のモノや事態を高める過剰使用が見られ、取り分けサービス業界（百貨店、飲食店、通信販売など）において、その使用が拡大されつつある。

### 3.2.3 表現形式「-크게요 (-lkyeyo)」に関わる過剰敬語

サービス業界の店員に見られる一風変わった言い方には、次のようなものがある (이수연 2012)。

19) a.점원 : 저 쪽 계산대로 가실게요.

店員 : あちらのレジにいらっしゃることを約束します。

b.간호사 : 이 쪽으로 누우실게요.

看護師 : こちら側に横になることを約束します。

19) における a と b には、主体敬語「-시-」と共に約束の意味を表す「-크게요」が用いられている。「-크게요」は話者が聴者に対して何かをしてあげるといった約束の意味を持つ。ゆえに、通常 19) の a では、店員から客に「あちらのレジに行きましょう (갑시다/가십시오)」という提案・勧誘の言い方が自然である。そして、b も看護師から患者に「こちら側に横になってください (누우세요/누우십시오)」という命令・依頼の言い方が適切である。

ただ、이익섭・임홍빈 (1983 : 233) の指摘のように、命令形はいくら丁寧に話しても命令であるため、それを避ける方法として命令形を勧誘形に変える（「して

ください (십시오)」→「しましょう (시지요)」。また勧誘形においても「しましょう (하십시오/십시오)」より、「합쇼체」を使うべき相手には「시지요」がより適切である。しかし、現代の接客の場面における「시지요」の言い方は、店員にはあまり好まれない。そこで, 이수연 (2010 : 89) は、店員や看護師は客 (患者) に命令することは丁寧ではないと思い、命令を緩和する表現として約束を意味する「-르게요」と主体敬語「-시-」の結合型を選択したという。つまり、サービス業界の店員からすれば客に対して命令文や勧誘文を用いることがあまり望ましくないという意識と、さらに客のためにサービスを提供していることをより明確に示すために、こうした特得な過剰敬語が用いられている (이수연 2012:90)。ただし, 민지혜 (2014 : 79) は「-르게요」の用法を「-시-」の拡大使用の1つとして解釈しているが、筆者はそう思わない。そもそも、主体を高める言語形式として「-시-」しか持たない韓国語では、サービス業界において「하쇼체 (主体敬語+略待丁寧形)」が最も一般的で、主体敬語抜きの「해요체 (略待丁寧形)」だけはあまり考えられないからである。

#### 4. 過剰敬語の拡散の原因

ここまで、両言語における過剰敬語の特徴について述べたが、それをまとめると、表1となる。

表1. 両言語における敬語使用

		日本語の敬語	韓国語の敬語
原則	共通	・視点と距離に基づいた社会的対人関係の表現	
	相違	・ウチ/ソトという視点の捉え方	・社会的力関係という視点の捉え方 (上位者聴者制約)
過剰敬語	形態	・対人関係に関わる過剰敬語 ・表現形式に関わる過剰敬語 ・状況に関わる過剰敬語	・主体敬語「-시-」に関わる過剰敬語 ・表現形式「-르게요」に関わる過剰敬語
	原因	・敬語使用における視点の捉え方 ・現代韓国語における客体敬語の衰退	

両言語の敬語は視点と距離に基づいた社会的対人関係の表現として現れる。しかし、日本語の敬語はウチ／ソトという視点の捉え方から対人関係に関わる過剰敬語、表現形式に関わる過剰敬語、状況に関わる過剰敬語が見られる。一方、韓国語の敬語は社会的力関係という視点の捉え方から、表現形式「-게요」に関わる過剰敬語が見られるものの、やはり主体敬語「-시-」に関わる過剰敬語が一般的である。こうした両言語における過剰敬語の相違は、敬語使用における視点の捉え方と現代韓国語における客体敬語の衰退に起因する。ゆえに、韓国語では状況に関わる過剰敬語が現れにくい<sup>15</sup>。

では、なぜ、こうした過剰敬語が社会全般に広がるのであろうか。まず、言語内部構造の側面から見れば、日本語は尊敬語・謙讓語・美化語、すべての言語内部構造において過剰敬語が見られるが、こうした過剰敬語は、言語内部構造における特定の言語形式の拡大解釈・適用に依る。例えば、「二重敬語」は尊敬語における「お・ご～になる」型に、さらに「(ら)れる」型が拡大解釈・適用された形として現れる。また、「さ入れ言葉」や「を入れ言葉」は謙讓語「いただく」の過剰使用から生まれた過剰敬語である(野口 2013 : 61)。山里 (2010) は「さ入れ言葉」の増加と「させていただく」の使用増加は強く結びついているとし、どのような動詞であっても「させていただく」を使用すれば謙讓語になるという使いやすさ・簡単さが「さ入れ言葉」の増加をもたらすという。そして、井上 (2010) は、美化語の使用はまず、女性が身近な語に付けるところから始まり、使用率を徐々に高め、ついには男性までに取り込んで込んで美化語として確立するという。すなわち、「さ入れ言葉」や「を入れ言葉」は謙讓語「いただく」の拡大解釈・適用によって、そして、美化語は「お」を付ける制約<sup>16</sup>の緩和によって起きる現象であるが、いずれも言語内部構造における拡大解釈・適用が過剰使用をもたらす。

<sup>15</sup> 例えば、11) のにおける「私の父が」という言葉を韓国語に直すと、「아버님/아버지/아빠」となるが、これは上位者聴者制約に沿った適切な敬語使用として見做される。

<sup>16</sup> 柴田 (1957) は、NHK の『日本語アクセント辞典 (1951)』における 47000 語の 7 分の 1 を系統的無作為抽出で抜き出し、そのうち特集な語を除いて 4830 語を調査語とした。そして東京在住の 18 人の主婦を対象に各語について、「お」の付く程度を調査した。その結果、①外来語には付きにくい、②「お」で始まる語には付きにくい、③長い語には付きにくい、④悪感情の語には付きにくい、⑤色・自然に関する語などには付きにくい、⑥食事、心の動き、感情、体の動きに関する語には付きにくい、⑦女性の日常生活ではあまり使わない語には付きにくいという。



一方、韓国語における主体敬語「-시-」の過剰使用は、社会的力関係の上位者に対する「하세요体」の定着に起因する。이정복 (2010 : 241-242) によれば、今の韓国社会では対者敬語としての略体丁寧体 (해요体) の使用が最も一般的になっている。ゆえに、社会的力関係の上位者に対して「어디 가세요? (どこにいらっしゃいますか) や「같이 가지지요 (一緒に行きましょう)」のように「主体敬語+略体丁寧体」の「하세요体」の使用が必須として認識されるという。すなわち、社会的力関係の上位者に対する「하세요体」の定着がモノや事態が主語である略体丁寧体 (해요体) にも拡大解釈・適用されて「-시-」の挿入をもたらしてしまう。という事は、両言語の過剰敬語はそれぞれの言語内部構造における拡大解釈・適用に起因して現れる現象である。

そして、語用論的側面からすれば、両言語における過剰敬語はいずれも、丁寧に話そうとする話者の意図に動機づけられた言語方略として現れる。菊池 (1997 : 45) は「させていただく」の使用の増加の背景に、恩恵の表現の拡張にあるという。すなわち、話題の人物もしくは聴者への恩恵をはっきり示そうとする話者の言語方略が過剰使用をもたらす。そして、洞澤・岡 (2006 : 30) はバイト敬語の動機づけについて、バイト敬語を使用することにより、若者たちは「お客」という他者と「店員」である自分との間に程よい心理的な距離を作り出すことができる。また、敬語を苦手とする若者たちがバイト敬語を使用することで、お客との間に円滑なコミュニケーションをとり、店員としてアルバイトの業務を問題なく、また無難にこなせるためであるという。

同様に韓国語における「-시-」の過剰使用も顧客へのより丁寧な対応を試みる過程の中で現れる意図的な言語方略である (이정복 2010 : 239)。取り分け、会社、百貨店、病院などにおける「-시-」の過剰使用は、経済的な利益を得るために聴者を積極的に高め、結果的に購買につなげようとする方略的な敬語法として現れる。また、客に対して命令文や勧誘文を回避するために用いられる「-주세요」も利益獲得の言語方略として生まれた表現である。つまり、両言語における過剰敬語は、円滑なコミュニケーションの遂行と共にその語用論的効果を利益獲得につなげようとする言語方略として現れる。

こうした過剰敬語の言語方略は社会言語学的側面と密接な関わりを持つ。内村 (1965 : 41) は「人と人との意思の疎通が欠如し、人間が孤立化していく傾向に

ある現代において、なにごとかを相手に伝えようとするれば、どうしてもインギンにならざるをえない」という。そして、井上（1999：84）は戦後の社会の変化と共に敬語使用の変化を敬語の民主化と呼び、現代敬語の特徴は上下という基準から親疎という基準に変わる傾向があり、敬語使用のパターンは双方向的で、平等な使用が求められている。さらに、敬語変化には一般的・普遍的な傾向性、いわゆる「敬意低減の法則<sup>17</sup>」が敬語をより丁寧語化させるという。つまり、社会の民衆化や平等化と相まって社会的言語規範としての敬語使用から互いの相互尊重を基盤とした円滑なコミュニケーションとしての敬語使用への役割の変化が過剰敬語を促す。

以上、言語内部構造の側面や語用論的側面、そして社会言語学的側面から見た両言語の過剰敬語は<sup>18</sup>、それぞれの言語内部構造における拡大解釈・適用によって現れるが、いずれも単に社会の変化における言葉の変化ではなく、社会の平等化・民衆化に伴う円滑なコミュニケーションの遂行を目的とした言語方略として現れる現象である。ただし、平成25年度日本の国語に関する世論調査（文化庁）や2010年度韓国の国民言語意識調査（国立国語院）によれば、こうした過剰敬語に対する両国民の意識は、今のところ、大体「気になる」もしくは「ぎこちない」という否定的な意見が多い。

## 5. おわりに

本稿は、日韓両言語における過剰敬語とは何か、また過剰敬語が広がる原因とは何かについて分析を行った。こうした過剰敬語は、日本語の「慇懃無礼」や韓国語

---

<sup>17</sup> 敬意低減の法則とは、ことばの丁寧さの度合が、使われているうちに以前より下がり、乱暴に感じられる傾向をいう。例えば、野口（2009：97）は、企業や組織名における「サン付け」の増加について、サービスを提供する立場の人間が客の名前に「様」を付けることが一般的になって、これまで人名に添えられていた「サン」は企業、組織、団体名につくようになったという。韓国語においても同様に、이정복（2000：201）は従来「님（様）」は「○○○씨（さん）」と呼びにくい状況に用いられていたが、病院、銀行、百貨店などの接客の場面で頻繁に用いられたことが日常生活における「님（様）」の拡散につながった。そして、今や職位や職級、職業、名前など人と関連したほとんどの言葉に付くようになり、相手を高めるためには一旦「님（様）」を付けなければならないという過剰使用が社会全般に広がり、不可能な用法であると見做された「大統領様（대통령님）」の言い方が現在のごく自然に使用されているという。

<sup>18</sup> ただし、ここでいう過剰敬語とは、意図的に相手のフェイスを脅かすための過剰敬語ではなく、言葉の変化の過程として現れる過剰敬語を指す。意図的に視点と距離を離脱させる過剰敬語またや状況に相応しくない過剰敬語はむしろ対人関係を悪化させてしまう。

の「過恭非礼 (과공비례)」のように、時には話者の品格の強調として、時には相手への優越感として現れ、相手を不愉快にさせてしまう (河・山中 2012、2013 など)。ということは、言葉の変化の過程として現れる過剰敬語と相手のフェイスを脅かすために用いられる過剰敬語では、異なる語用論的効果が予想される。今後、この課題について、取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 井上史雄 (1986). 「言葉の乱れの社会言語学」『日本語学』12 : 5-12.
- 井上史雄 (1999). 『敬語はこわくない—最新用例と基礎知識—』東京 : 講談社現代新書
- 井上史雄 (2010). 「お」の使い分けにみる美化語の循環過程—「お使い分け」データの解釈—『日本語の研究』64 : 63-78.
- 内村直也 (1965). 「インギンブレ論」『言語生活』165 : 38-41.
- 梅田博之 (1977). 『岩波講座日本語 4 敬語』東京 : 岩波書店
- 大石初太郎 (1983). 『現代敬語研究』東京 : 筑摩書房
- 菊地康人 (1997). 「変わりゆく「させていただく」」『言語』26-6 : 40-47.
- 北澤尚 (1995). 「動詞敬語の誤用の類型」『東京学芸大学紀要第2 部門人文科学』46 : 33-44.
- 北原保雄 (1996). 『表現文法の方法』東京 : 大修館書店
- 金田一京助 (1959). 『日本の敬語』東京 : 角川親書
- 久野暉 (1978). 『談話の文法』東京 : 大修館書店
- 佐野真一郎 (2008). 「『日本語話し言葉コーパス』に現れる「さ入れ言葉」に関する数量的分析」『言語研究』133 : 77-106.
- 佐野真一郎 (2009). 「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究—「ら抜き言葉」、「さ入れ言葉」、「れ足す言葉」を例として—」『Sophia linguistica』57 : 343-358.
- 柴田武 (1957). 「お」の付く語・付かない語」『言語生活』70 : 40-49.
- 丁仁京 (2013). 「韓国語の「事物尊称」について」『言語と文明』11 : 55-71.
- 滝浦真人 (2005). 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』東京 : 大修館書店
- 日本放送協会 (1951). 『日本語アクセント辞典』東京 : 日本放送出版協会
- 野口恵子 (2009). 『バカ丁寧化する日本語—敬語コミュニケーションの行方—』東京 : 光文社
- 野口恵子 (2013). 『失礼な敬語—誤用例から学ぶ、正しい使い方—』東京 : 光文社
- 河正一 (2013). 「関連性理論から見た敬語の過剰使用とその語用論的効果—慇懃無礼を中心に—」『日語日文学研究』87-1 : 233-257.
- 河正一・山中信彦 (2012). 「質問紙調査に基づく「慇懃無礼」の意味論と語用論—原型とポライトネスの観点から—」『計量国語学会』28-4 : 125-152.
- 文化庁 (2007). 『敬語の指針』<http://www.bunka.go.jp>
- 本田啓 (2006). 「ニナリマス敬語について」『駿河台大学論叢』31 : 77-91.
- 洞澤伸・岡江里子 (2006). 「バイト敬語における話者の心理と聴者の印象」『岐阜大学地域科学部研究報告』19 : 1-31.
- 福島直恭 (2013). 『幻想の敬語論—進歩史観的敬語史に関する批判的研究—』東京 : 笠間書院
- 森下喜一・池景来 (1989). 『日本語と韓国語の敬語』東京 : 白帝社
- 山下仁 (2001). 「敬語研究のイデオロギー批判」野呂香代子・山下仁 (編) 『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み—』東京 : 三元社、pp.51-83.
- 山里優 (2010). 「「さ入れ言葉」の増加について」『国文学』94 : 96-112.

- 강창석 (1987). 「국어 경어법의 본질적인 의미」 『울산어문논집』 3 : 31-54.
- 곽숙영 (2009). 「주체높임 ‘-시.’의 사용 실태 조사를 통한 문법적 의미 고찰」 홍종선의 『국어 높임법 표현의 발달』 pp.31-65.
- 국립국어원 (2010). 『2010년 국민의 언어의식 조사』 문화체육관광부 국립국어원
- 민지혜 (2014). 『‘-시.’의 확대 사용 양상에 대한 문법 교육적 연구 : 서비스 업종의 담화 분석 내용을 중심으로』 이화여자대학교 석사논문
- 박양규 (1975). 「존칭체언의 통사론적 특징」 『진단학보』 40 : 81-108.
- 박지순 (2014). 「한국어 상대높임법 실현의 영향 요인 연구」 『새국어교육』 98 : 289-324.
- 서정수 (1984). 『존대법의 연구』 한신문화사
- 성기철 (1991). 「국어 敬語法의 일반적 특징」 『새국어생활』 1-3 : 2-22.
- 아시다마끼고 (2005). 「한일 양국어의 대우법 대조 연구」 『한국언어문화학』 2-2 : 193-212.
- 이래호 (2012). 「선어말 어미 ‘-시.’의 청자 존대 기능에 대한 고찰」 『언어학연구』 23 : 147-166.
- 이수연 (2012). 「서비스업 종사자들의 언어 사용 양상 : 백화점 점원의 언어 사용을 중심으로」 『어문연구』 71 : 79-96.
- 이익섭 (1974). 「국어 경어법의 체계화 문제」 『국어학』 2 : 39-64.
- 이익섭 (1994). 『사회언어학』 믿음사
- 이익섭 · 임홍빈 (1983). 『국어문법론』 학연사
- 이정복 (2000). 「통신 언어로서의 호칭어 ‘님’에 대한 분석」 『사회언어학』 8-2 : 193-221.
- 이정복 (2006). 『한국어의 경어법, 힘과 거리의 미학』 소통
- 이정복 (2010). 「상황 주체 높임 ‘-시.’의 확산과 배경」 『언어과학연구』 55 : 217-246.
- 임동훈 (2000). 『한국어 어미 ‘-시.’의 문법』 태학사
- 임홍빈 · 장소원 (1995). 『국어문법론 1』 방송통신대 출판부
- 최봉영 (2005). 『한국 사회의 차별과 억압 : 존비어체계와 형식적 권위주의』 지식산업사

(高崎經濟大学 非常勤講師)

## 韓国語教育研究 第5号

ISSN 2186-2044

2015年9月10日印刷

2015年9月15日発行

発行 日本韓国語教育学会  
〒161-853 東京都新宿区中落合 4-31-1  
目白大学外国語学部韓国語学科  
TEL 03(5996)3162  
e-mail: jaklemejiro@gmail.com

編集 韓国語教育研究編集委員会  
(委員長 / kcmoon@pm.tbgu.ac.jp)

印刷 株式会社 仙台共同印刷  
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区  
日の出町二丁目 4-2  
TEL 022(236)7161(代)/FAX 022(236)7163